

講演会

第108回

理事 有瀧龍雄

期 日

平成5年6月27日(日)午後3時～

会 場

越谷市中央市民会館5F 第7会議室

演 題

『わが郷土こしがや』

## 越ヶ谷町から越谷市へ驚異の変貌

明治37年(1904)11月3日、越ヶ谷町中町に生まれ、町立越ヶ谷小学校、県立柏壁中学校(現春日部高校)、千葉高等園芸(現千葉大学園芸学部)を卒業した。小学校時代の夏の夕べ、東武鉄道線路を越えて行くと水田の上に沢山の螢が飛んでいた。当時(大正初期)東武鉄道は汽車で、越谷町には駅がなく現在の北越谷駅が越谷駅で、汽車は2時間おきに発車した。柏中時代、早朝線路を歩いて大沢町の越谷駅へ、柏壁で下車して歩いて柏中へ。当時は岩槻・大宮行きの電車もなかった。当時学校も数少なく、進学する生徒も越ヶ谷町から僅か3名。柏中1年生は80名、5年までの全校生でも500名足らずであった。

友人の内、最もユニークなのは越ヶ谷小では、田口憲一君(共産党で投獄17ヶ年)久々に姿を見せた時には共産党を脱退。専ら著述をしていたが、『17年も頑張ったのに何故共産党をやめたのか』と尋ねたところ、彼は笑いながら『あんなことは子供の時で、いくらか大人になったのでやめたよ』との返事。晩年には房州の大きな洋式住宅で悠々自適かたがた著述をしておられた。今彼が存命していたら、昨今世界の共産国が次々と、方向転換している現況を彼は何と言うか興味あるが、すでに他界し聞く由もない。

(昭和54年12月10日死去、市内の天嶽寺の墓地に眠っている)。

次に柏中の同期生では、理学博士奥貫一男君で東大卒業後、徳川生物学研究所を経て、大阪大学理学部教授。チトクロームの研究で学士院賞、朝日賞を受賞。その後阪大名誉教授・学士院会員。ずっと宝塚市に在住。

最後に千葉大・園芸学部では理学博士大井次三郎君で第二次大戦中、インドネシアのポイテンゾルグ植物園(現ボゴール植物園)で司政官として活躍したが、敗戦で一時捕虜となった。帰国後、国立科学博物館に勤務。膨大な『日本植物誌』を著わし、スミソニアン財団の援助で出版された英文の『Flora of Japan』はロンドン・ワシントン・ニューヨークその他の書店に列んでいたのを思い出す。先年他界し、越谷市内の浄光寺に眠っている。

昭和2年(1927)私有地に、樹木を主体とした植物園アリタキ・アー

ボレータム (The Aritaki Arboretum) を開設した。

園内にある木々は各方面から贈られたものが多く、

・京大理学部の小石川植物園からの

ナンキンハゼ (*Sapium sebiferum*)

シナ・サワグルミ (*Pterocarya stenoptera*)

・盛岡地裁所長千種達夫氏よりの

シダレカツラ (*Cercidiphyllum japonicum f. pendulum*)

・パリーのヴィルモラン種苗会社よりの

ラクウショウ [落羽松 (*Taxodium disticum*)]

・オーストラリア・Adelaide植物園よりの

ユーカリ樹 (*Eucalyptus camaldulensis*)

・アメリカのハーバード大学付属アーノルド アーボレータム100周年記念に頂いたディポンティ・マロニエ (*Aesculus* X "Dupontii")

など現在大木となり、ラクウショウは越谷市の文化財(天然記念物)に指定されている。

## ラクウショウ

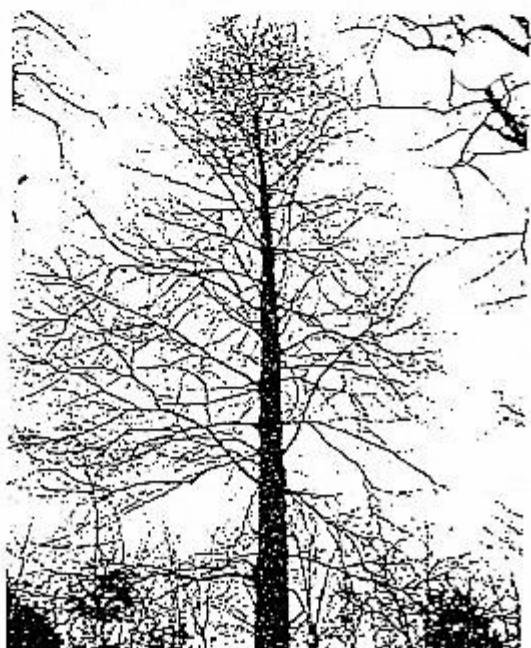
市指定・天然記念物

昭和42年1月11日指定

●越谷市越ヶ谷2566 (アリタキ・アーボレータム)

ラクウショウはヌマスギとも呼ばれ、アメリカ南部からメキシコにかけて分布している落葉針葉樹である。沼沢地・河岸・湖岸などの水湿地を好む。成長すると樹高25m~50m、直径2~5mにもなり、樹齢750~1,000年にも達する。春の新緑は明るい緑色で、羽状に並ぶ葉は柔軟で羽毛に触れるような感があり、秋末には煉瓦色に紅葉して風で飛び散る。花は5月に雌花・雄花を生じ、雌花は後に卵円形で、ややヒノキの實を大きくしたような果実を結び、翌年秋に成熟する。

このラクウショウは、昭和2年に輸入種子を播種したものであるが、この樹の特徴である地帯近くの根から垂直に膝状の隆起を生じる膝根がみられる。



第二次大戦で小生もアーボレータムも大影響を受けた。戦後、昭和41年(1966)、文部大臣から『博物館相当施設』に指定され一般公開した。園は現在、社団法人「日本植物園協会(会長東大教授岩槻博士)」および国際植物園連合(IABG International Association of Botanic Gardens)の正会員園となっている。なお市内中町の分園には樹齢400余年の「タブノキ」があり、越谷市の指定文化財(天然記念物)となっている。

30余年前越ヶ谷町・大沢町他8ヶ村が合体し、越谷市が誕生した。人口4~5万程度の市が現在30余万になんなんとしている。従って建物は激増し、いま市内でまとまった緑のある所は、宮内庁の鴨場周辺とアーボレータム・久伊豆神社・天嶽寺のあたりぐらいとなっている。そこで、前記の「タブノキ」の種子や苗木を沢山、市の緑化用に数年間寄贈した。また30余年前、越谷市の誕生を祝って「アケボノスギ」の苗木を市役所・市立小中学校・県立高校・裁判所・農協に贈ったが、久伊豆神社には100本贈り400mの参道に配植され、初夏の新緑、秋末の紅葉は参詣する人々の目を楽しませている。(注)アケボノスギは落葉性針葉樹で学名をメタセコイヤ(*Metasequoia glyptostroboides*)で日本では皇居内にあるものが第一号で、昭和天皇は昭和62年の「歌会初め」で次のように詠じられた。

「わがくにの立ちなおりこし年々に アケボノスギの 木は伸びにけり」。

## 有瀧家のタブノキ

市指定・天然記念物

昭和42年1月11日指定

●越谷市中町8-26(有瀧龍雄)

タブノキは、クスノキ科の常緑喬木で暖地に自生する。一名イヌグスとも呼ばれ、クスノキに較べてはるかに耐寒性が高いが樟脳は採れない。

有瀧家のタブノキは、有瀧邸の西隣にある。道を隔てた所に越ヶ谷小学校があり、枝は道の上まで伸びている。幹廻りは3.7m、樹高は17m、枝張り(径)は10mである。幹の1.5mのところ寄生菌サルノコシカケの寄生跡があったが、昭和59年に除去し消毒したので、あと何百年かはその寿命を保つものとみられている。その樹齢はおよそ400年と推定されている。

